

追悼



池田長生先生を偲んで

渡辺 裕夫

Watanabe Yasuo

「Aktivität kommt」池田先生の授業はそんな一節から始まりました。昭和30年代に当時の西ドイツに留学された時のお話であったと思いますが「原子炉で生成されたRIはこんな言葉と共に届くので、急いで取りに行き化学分離や放射能測定をするのだ」と楽しそうにお話しされていたのがはっきりと思い出されます。

私は池田研究室でホットアトムの研究に携わりましたが、立教大学の原子炉、東北大学核理研の電子ライナック、パークレーの88インチサイクロトン等での実験の際にいつも先生のこのお話が思い起こされたものでした。

池田先生はとにかく気さくな方で教授室にこもることなく度々研究室で過ごされ、時には筆者らと一緒にテレビの大相撲中継をご覧になることも有り、学生達との対話の機会を数多く与えて下さいました。

OBの方々や筆者ら学生達だけでなく同僚の先生方や更には出入りの業者の人達からも「池田先生」ではなく親しみを込めて「いけちゃんさん」と呼ばれておられました。ご自身でも届いた郵便物を持って来られ「宛名に池長様と書いてあった」と、うれしそうにされていたのを思い出します。そしていつでも、講義中も研究室でも白衣をお召しになっていたのが印象的でした。また穏やかな方でもあり研究室のゼミや学会発表に際してもほとんど叱られた覚えはありません。私は課題こそ池田先生にいたい

たものの研究は自由にさせていただき、東京都立大学の佐野博敏先生のところへ移ってメスバウアー分光法で研究を続けることになった際も快く送り出していただきました。

池田先生は大正14(1925)年に東京都下府中市でお生まれになり昭和20(1945)年に東京帝国大学理学部化学科に入学されましたが、戦時中の学徒勤労動員で理化学研究所の仁科研究室に派遣されました。終戦後の昭和23(1948)年に東京大学理学部をご卒業され、昭和25(1950)年に仁科芳雄博士等により戦後初めて輸入されたRIについてご研究されました。 ^{125}Sb として米国から輸入されたこのRIは原子炉で中性子照射した金属スズであり多くの核種が混在していたため分離が必要となり、揮発法等による ^{125}Sb や $^{113\text{m}}\text{In}$ の化学分離について発表されております。

1952年の科研(現理化学研究所)の26インチサイクロトロン再建、1957年の日本原子力研究所のJRR-1の運転開始等、研究環境も整って来る中で様々な分野の研究をなさいました。1954年3月のビキニ被ばく事件を契機としてフォールアウト核分裂生成物の分離や環境放射能の測定、原子力の平和利用に伴う放射能の研究、トレーサや放射化分析による極微量分析、不足当量法や同位体交換分析法の開発、ホットアトム化学によるRIの分離・精製及び溶媒抽出法やイオン交換法等を応用した反跳機構についての研究、更には地球化学的分野として温泉水中のRnや ^3H の分析等で多くの成果を上げられています。

旧動燃や放医研等との関係も深く、人的交流や委託研究・共同研究にも積極的で門下生から数多くの放射化学分野の重要な人材を輩出されました。一方で先生の生活スタイルはまるで江戸の武士のような質素・儉約を旨としており、その飾らない生き方に大きな感銘を受けました。

ついこの間卒寿の会で元気なお姿をお見かけしたばかりだと思っておりましたのに、2020年9月29日にご逝去されたと聞き驚くばかりです。ご時世でお身内だけのご葬儀となりお別れ会も延期になってしまい誠に残念です。

ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(電気通信大学(池田研究室OB))